

小学校教員養成コース学生向けピアノ教材の開発

—大人数クラス授業での使用を前提として—

石井 哲夫

小学校教員養成コース学生向けピアノ教材の開発

—大人数クラス授業での使用を前提として—

石井 哲夫

Teaching Materials Development for Piano Technique for Students of Elementary School Student Teachers

ISHII Tetsuo

摘要

学部改組に伴うカリキュラム改定で、小学校教員免許取得希望の学生のための音楽実技の授業時間数は半減した。またピアノ実技の指導も従前は1人の担当者が90分で4～5名の学生を担当していたのが、改組後は1人の担当者が90分で40～60名の学生のピアノ実技の指導を行わなくてはならなくなった。このような中では短い練習時間で、かつ独習が可能なピアノ教材が求められる。従前使われていたピアノ教材の長所は残し、短期の履修期間で小学校教員として必要なピアノ演奏技能の開発、ということで、本研究は進められた。

キーワード : 音楽教育, 教員養成, 教材開発, バイエルピアノ教則本, 左手の旋律, 主要3和音による伴奏

Keywords : Education of Music training of teachers develop teaching materials Beyer vorshule im Klavierspiel melodie by lefthand accompaniment by the main trial chordes

0. 序論

2005年10月、本学(旧)教育学部は人間発達科学部に改組され、学部名称だけでなく、学科・コース(専攻)、教育・内容、学生の卒業要件等が教育学部時代のそれとは全く変わった。小学校教員1級普通免許状を取得して卒業するために必要な音楽関連の科目と必要単位数を見ても、教育学部学校教員養成課程だった時代(以下、旧課程という)と人間発達科学部となった現在(以下、新課程という)では以下のような違いがある。

(旧課程)

教科に関する科目としてソルフェージュ(1期・1単位)、ピアノ奏法(1期・1単位)ソルフェージュ、ピアノ奏法両方を習得して「音楽」を習得したものとしていた。尚「音楽」は選択必修科目

教職に関する科目として音楽科教育法(1期・2単位)必修(小学校教諭2級普通免許状のみ取得希望の学生にとっては選択必修科目)

(新課程)

教科に関する科目として音楽(1期・2単位)選択必修科目

教職に関する科目として音楽科教育論(1期・2単位)必修

これでわかるとおり新課程では、小学校教員免許取得を希望する学生に対する音楽(実技・教科教育)の時間は旧課程の50%となっている。しかも、旧課程では実技に関する授業科目でもピアノ実技の授業とソルフェージュ(楽譜の読み書きと平易な音楽理論)の授業があったのに対し、新課程では「音楽」のみでこの両方をカバーしなければならなくなった。そうすると、学生に対する音楽実技指導についても必然的に旧課程時代に比べて効率のよい教材、指導方法が求められてくる。本研究では、その中の教材という点に着目し、小学校教員免許取得希望学生向けの効率の良い音楽実技用教材の開発ということで進められた。今回の発表はその中間報告である。

1. バイエルピアノ教則本再考

旧課程では、小学校・幼稚園・養護学校(現特別支援学校)教員免許取得希望の学生に対するピアノ教材として、主としてバイエルピアノ教則本が使われた。この教則本は100余りの練習曲といくつかの予備練習で成り立っている。譜例1で示すとおり、最初は2本の指を動

かす訓練，同様に3本指，4本指，5本指・・・と系統的に進んでゆく。

第8番（譜例2）では，左手の属音保続の上に，右

手の旋律が乗るという構造の楽曲が出てくる。これはウィーン古典派時代の音楽によく見られた手法（譜例3）である。

右手の練習

左手の練習

譜例1 バイエルピアノ教則本導入部分

譜例2 バイエルピアノ教則本第8番より

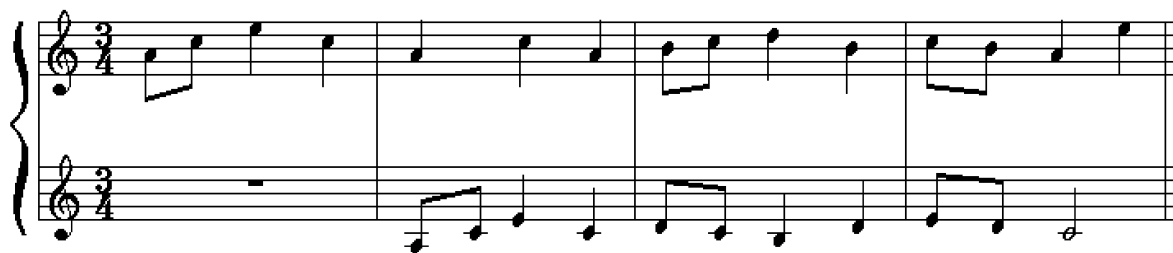
譜例3 M.Clementi Sonation Op.36 No.3 第1楽章より

第60番（譜例4）では、カノンが出てくる。無論これはバロック時代の音楽によく見られた特徴である（譜例5）。尚、この第60番で初めて短調の楽曲が出てくる。

以上は、この教則本の中のほんの一部の例であるが、これらからもわかるとおり、この教則本では、ごく初心

者のうちに古典派時代の鍵盤楽器音楽における楽曲のつくりの典型例が学べるようになっている（下線部は筆者見解）。

旧課程のピアノ奏法では、この教則本の第66番（譜例6）まで習得することをこの科目の単位取得要件として



譜例4 バイエルピアノ教則本第60番より



譜例5 J.S.Bach イギリス組曲第2番 preludeより



譜例6 バイエルピアノ教則本第66番

いた。この教則本では、ここまでは右手主旋律（重音なし、すべて単旋律）、左手伴奏（重音、分散和音、対旋律、3重音はまだ出てこない）という楽曲が並んでいる。小学校教員が音楽の授業を担当するにあたって最小限必要な鍵盤楽器（ピアノ、オルガン等）の奏法は、この教則本のここまです習得することによって身につけることができる。

ここまで、この教則本の長所をあげてきたが、新しい教材の開発作成にあたっては、従前の教材の長所・短所、両方を見てもおこななくてはならないのは当然である。自宅でピアノ教室を主宰しピアノ指導者から聴き取りを行ったり、それらの指導者の公式サイトなどを見ると、この教則本の短所としては以下のようなものがあげられている。（ ）内は筆者注記。

- i) ヘ音記号の初出が遅い（第54番以降）
- ii) ハ長調以外の調の曲の初出が遅い（第60番でイ短調、第70番でト長調）但し、第32番において、調号はハ長調のまま、実際にはト長調に聞こえる曲は出てきている。
- iii) 和声的にT（トニック）、D（ドミナント）のみで出来ている曲が多く、S（サブドミナント）の和音の感覚が身につけにくい。（初出は第49番、本格的に出てくるのは第55番）

iv) 右手主旋律・左手伴奏というタイプの曲が多く、左手の伴奏が主旋律と同等に音楽的意味をもつ楽曲の初出が遅い（第53番、本格的に出てくるのは第67番以後）

以上のように、この教則本ではバロック・古典派の鍵盤楽器音楽のいくつかのパターンは初心者のうちから習得できるようにはなっているが、我々の先人たちが残した財産（音楽作品）の大部分の要素については教則本全体のかかなり後ろの部分に入らないと出てこないことがわかる。ただ、これについては別の側面も考えなくてはならない。このバイエルピアノ教則本は、わが国では長きに渡って、子供のピアノ学習者を対象に用いられてきた。そこで着目したいのは、ピアノを習っている子供が日常家で練習にかけられる時間がどのように変化しているのか、ということである。昭和30年、40年頃とは違って、今はひとりの子供がピアノなどの習い事にどれだけの時間をかけているかについては、この約20年ほどの間に大きな変化がみられる。1人の子供がピアノなどの習い事（学習塾やスポーツ関連のスクールなども含む）を、いくつ同時平行でやっているかということである。昔の子供なら習い事が1つ、多くても3つ程度だったのが、今では日曜日を除き毎日何かの教室に通っているという子供も多くなってきた（図1）。

そうすると、いきおいピアノの練習にかけられる時間

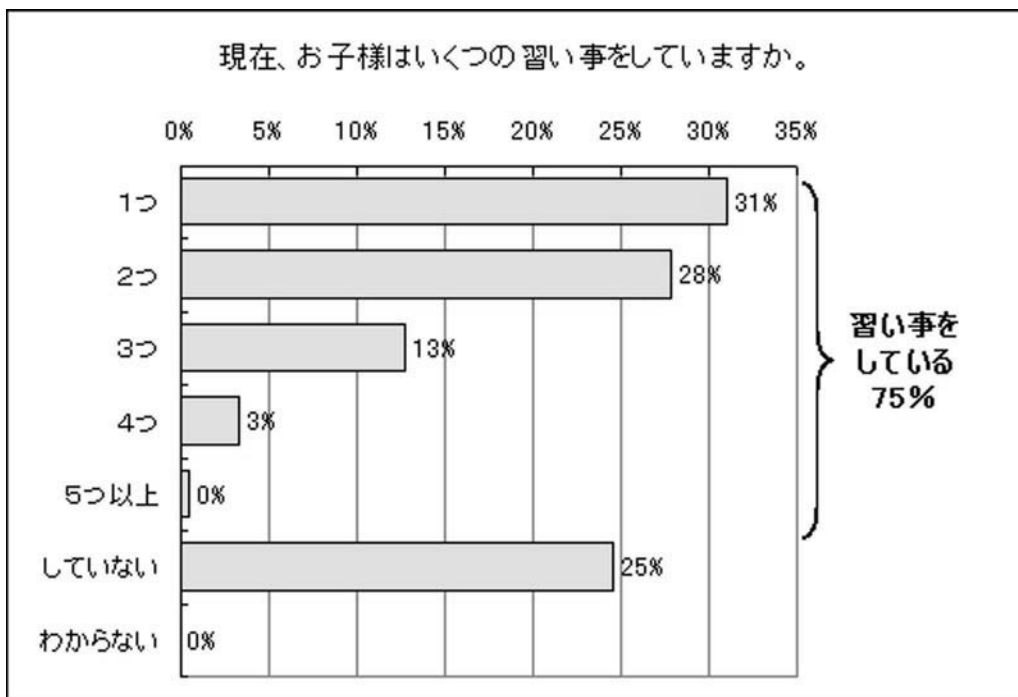


図1 ひとりの子供がいくつ習い事をしているか
gooリサーチと読売新聞社による共同企画調査（2006年11月27日）

は短くなる。その結果、昔のピアノ学習者なら、バイエルピアノ教則本を最初から始めて第66番まで習得するのに半年あれば充分だったのが、今日の子供の学習者の場合、2年～3年を要することになる（音楽の基本的な形を覚えるのにそれだけの年月を要してしまう）。

この問題は、小学校教諭免許の取得を希望する学生向けのピアノ奏法でも同様に発生する。すなわち昭和50年頃のように教員養成系学部において必要な単位を習得し、教育実習に行けば教員免許状が取得できるのならともかく、今日では教員免許状取得のためには介護等体験が必須になっていたり^(*1)、昨今の教員採用試験合格がますます難しくなっていることから学生には教員採用試験対策に早いうちから多くの時間をかけるような指導をせざるを得なくなっている現状を考え合わせると（ただし、小学校教員採用試験において出題される音楽実技試験のほとんどは鍵盤楽器で伴奏を演奏しながら歌う、いわゆる弾き歌い^(*2)なのであるが）、学生にピアノの練習のために時間的負担は現状以上にはかけられない。

このように考えて、新しく作成するピアノ教材は以下の点を考慮したものとした。

i) 学生の履修期間は実質15週間（授業が週1回だと

して、授業回数は15回）

- ii) 旧課程のソルフェージュとピアノ奏法の内容の両方を含むものであること
- iii) ピアノ・オルガン等の鍵盤楽器にそれまで一度も触れたことのない学生を対象とすること、
- iv) バイエルピアノ教本の長所はとりいれたものとする
- v) ヘ音記号は初期のうちからとりいれる
- vi) これを使って学生がピアノ奏法の基本を独習できるようなものであること。ただし、学生が鍵盤楽器の練習のためにかけられる時間は1日平均30分以内であることを前提とすること
- vi) 扱う楽曲は学校教育（保育）の現場で即使用可能なものであること
- vii) この授業のあとに続く音楽科教育論で必要とされる音楽実技力に到達可能なものであること

（全授業終了時に、概ね譜例7に示すレベルの楽曲の楽譜が読めてピアノ等の鍵盤楽器で演奏できること）

では以下に、実際に作成中の教材（以下、「本教材」という）を示す。

う み

譜例7 到達目標 うみ（小学校第1学年歌唱共通教材）

2. 導入部分

ここでは、「音楽」の履修者の中にはピアノに初めて向かう、という学生もいる可能性も考え、これに続く練習課題に取り組んでゆくための必要最小限の知識について

では図2のような図や写真を使用し、授業時間以外でもその内容を学生が独習できるものにすることに重点をおいた。(ただし、これは入門者向けのピアノ教則本では殆ど行われていることである)

基本的な指使いについては、教則本によっては図3の

中央八 (真ん中のド)

Do Re Mi Fa Sol La Si (イタリア式)
 C D E F G A B (英米式)
 C D E F G A H (ドイツ式)
 Ut Re Mi Fa Sol La Si (フランス式)
 ハ ニ ホ ヘ ト イ ロ (日本式)

左手 右手

いちばんやさしい指使い 右手 1 2 3 4 5

ド レ ミ ファ ソ ド レ ミ ファ ソ

左手 5 4 3 2 1

図2 導入部 鍵盤と基本的な指使い

右手 1 2 3 4 5

左手 5 4 3 2 1

図3 中央八音を両手とも第1指とする

ように中央ハ音を両手とも第1指，以降右手は高音域に向かって第2，3，4，5指，左手は低音域に向かって第2，3，4，5指と振ってゆくものもあるが^(*3)，本教材では，右手はDo音を第1指とし，以降高音域に向かって第2，3，4，5指，左手はDo音を第5指とし，以降高音域に向かって第4，3，2，1指とするものを採択する。

これは実際，小学校における音楽の授業の場で必要とされるピアノ演奏力は譜例8のように右手で主旋律を弾きながら左手で伴奏する能力を求められるものが多く，こちらの指使いを基本として習得させた方がよいと考えられるためである。

まきばの朝 第4学年歌唱共通教材

おどろう楽しいポーレチケ ポーランド民謡

譜例8 小学校歌唱教材のピアノ伴奏例

3. 平易な旋律を弾く（いちばんやさしい指使いで弾ける旋律）

学生でも一般のピアノ学習者でも入門者にとって困難なことのひとつに左手が思うように動かない、というのがある。そこで本教材では最初にこれに取り組む。方法

としては（おそらくどの学生も知っているであろうと思われる）わが国および諸外国の民謡・童謡等の旋律を用い、同じ曲で少しずつステップアップしてゆくようにした。採択した曲は「ちょうちょ」（スペイン民謡）と「ぶんぶん」（ボヘミア民謡）。以下は「ちょうちょ」の例

ちょうちょ step1

The score for 'ちょうちょ step1' is written in 4/4 time. It consists of two systems of piano staves. The first system has a treble clef staff with notes G4, A4, B4, C5, D5, E5, F5, G5 and a bass clef staff with notes G3, F3, E3, D3, C3, B2, A2, G2. Fingerings are indicated above the notes: 5 3 for the first two notes, 4 2 for the next two, 1 2 3 4 for the next four, and 5 for the final note. The second system has a treble clef staff with notes G4, A4, B4, C5, D5, E5, F5, G5 and a bass clef staff with notes G3, F3, E3, D3, C3, B2, A2, G2. Fingerings are indicated below the notes: 1 3 5 for the first three notes, 2 4 for the next two, 5 4 3 2 1 for the next five, and 1 for the final note.

譜例9の1 ちょうちょ (step1)

ちょうちょ step2

The score for 'ちょうちょ step2' is written in 4/4 time. It consists of two systems of piano staves. The first system has a treble clef staff with notes G4, A4, B4, C5, D5, E5, F5, G5 and a bass clef staff with notes G3, F3, E3, D3, C3, B2, A2, G2. A single fingering '1' is indicated below the first note of the bass staff. The second system has a treble clef staff with notes G4, A4, B4, C5, D5, E5, F5, G5 and a bass clef staff with notes G3, F3, E3, D3, C3, B2, A2, G2.

譜例9の2 ちょうちょ (step2)

である。右手のみ・左手のみ・両手（ユニゾン）で完全に弾けるようにする（step 1, 譜例 9 の 1），右手の主旋律はそのまま左手は属音（音階の第 5 音）単音による伴奏（step 2, 譜例 9 の 2）。T（トニック）、D（ド

ミナント）のみを用いた 3 和音（trial chord）による伴奏（step 3, 譜例 9 の 3）, 同, 分散和音による伴奏（step 4, 譜例 9 の 4）と進めることにより少しずつ高度な左手の動きを習得させる。

ちょうちよ step 3

譜例 9 の 3 ちょうちよ (step3)

ちょうちよ step 4

譜例 9 の 4 ちょうちよ (step4)

「ぶんぶんぶん」のstep 2（譜例10の1）では、左手の伴奏は属音の単音ではなく、少し音に動きがあるものとした。学習者には、この課題に取り組む前に、左手でこの曲の主旋律が完全に弾けるようにしておくことを指

示しておく。

ぶんぶんぶんのstep 3（譜例10の2）では、step 2に加え、一部に左手の重音が出てくる。

ぶん ぶん ぶん step 2

譜例10の1 ぶんぶんぶん (step2)

ぶん ぶん ぶん step 3

譜例10の2 ぶんぶんぶん (step3)

4. 本研究の今後の課題

平成22年度後期の「音楽」の授業では、本教材のここまでの部分を用いて、ピアノ実技の導入部分の授業を行った。その結果、小学校～高校時代までピアノ教室等に通っていたという学生を除き、概ね小学校の音楽の授業で習う鍵盤ハーモニカ程度の技能力はある学生が「ぶんぶんぶん」のstep 3まで到達するのに要した期間は平均で3週間（1回/週の授業3回）、学生の自己申告による1日の練習時間を平均すると75分程度であった。

i) 本教材のこの後

ここまでのところでは基本的な指使い（ポジション移動、1の指くぐり、1の指越え一切なし）で演奏可能な曲しか出てきていない。この後、

- これらの応用的指使いを必要とする曲、
- 短調の楽曲（小学校学習指導要領「音楽」では第5～6学年においてイ短調を教えることになっている^(*)4)
- 調号として#♭それぞれ1個ずつの範囲の長調と短調（ト長調、ホ短調、ヘ長調、ニ短調）の楽曲（これらは小学校学習指導要領「音楽」で児童に教えなければならないこととしては出てこないが授業を担当する教員として知っておいた方がよいと考えられる）
- 左手伴奏部分に対旋律が現れる楽曲（小学校学習指導要領「音楽」では第3,4学年において副次的旋律を取り扱うことになっている^(*)5)

が続く予定である。

ii) 本教材を用いて行なわれるピアノ実技指導の結果評価

平成22年度後学期の「音楽」でも本教材を部分的に採り入れてのピアノ実技指導は行なってきたが、23年度後学期からは本教材を全面的に用いることとし、一定のステップまでに到達するのに学生が要した時間などのデータを綿密にとり、本教材を用いた授業の結果評価を行なう。その結果に基づき教材に改良を加え、

平成24年度中の完成を目標としたい。

(注)

- * 1 人の心の傷みがわかる教員、各人の価値観の相違が認められる心をもった教員の実現を目的に、平成10年4月1日より、教員免許取得者に義務づけられた。
- * 2 富山県、石川県、福井県、新潟県、岐阜県など。一部の県では初級程度のピアノ曲の演奏を課題としていているところもある。（バイエルピアノ教則本、ブルグミュラー25の練習曲程度）
- * 3 みんなのオルガン・ピアノの本（ヤマハ音楽振興会編纂）など
- * 4 小学校学習指導要領（平成20年文部科学省）第2章第6節音楽第2各学年の目標及び内容 [第5学年及び第6学年] 2内容A表現(1)ア. 範唱を聴いたり、ハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして歌うこと。
- * 5 同上, [第3学年及び第4学年] 2内容A表現(2)エ. 互いの楽器の音や副次的な旋律、伴奏を聴いて、音を合わせて演奏すること。

[参考楽譜]

全訳バイエルピアノ教則本（全音楽譜出版社）
教職課程のための大学ピアノ教本～バイエルとツェルニーによる展開（教育芸術社）

(2011年8月29日受付)

(2011年10月25日受理)

付録1 ちょうちょ (step4) の完成形

ちょうちょ step 4

5 1 3 1 5 1 3 1

5 1 5 1 5 1 5
※(4 1 5 1 4 1 5)

5 1 5 1 5 1 5
※(4 1 5 1 4 1 5)

※できればこの指使いにもチャレンジしてみよう

左手、和音による伴奏（2）分散和音

左手の予備練習

5 1 3 1 5 1 3 1

前ページver.3の予備練習と同じ要領で、やってみましょう

付録2 ぶんぶんぶん (step3) の完成形

ぶん ぶん ぶん ver.3

The piano score is written in 2/4 time and consists of three systems of two staves each. The first system includes fingerings: 1/3, 1/4, 1/5, 1/2, 1, 1/3. The second system includes fingerings: 5, 4, 3, 2, 3, 4. The piece concludes with a double bar line.

